

モブリリイの裁判

古来より火事場泥棒と呼ばれる存在がいる。家事や災害が起きると住人は避難するため、普段なら人の目がある場所も無人となる。誰に見られる心配もないその場所で窃盗を働く不届き至極な人間という者は、いつの時代にもいたものである。

現代であればヒュージの出現も普通の人間にはどうしようもない、警報が鳴ったら避難しなければいけない災害のひとつ。どこからともなく現れる怪物が出現したら市民は防衛をリリイに任せて逃げ惑う。リリイとしても一般人が残っていたままでは戦いにくいので、大規模な戦闘は避難を待つて行うのが定石だった。

しかし、ハリケーンを追いかけて全米中をトラックで走り回る命知らずがいたように、ヒュージが出現しても逃げるところかむしろ現場に向かっていく困った人間も存在する。その多くはヒュージと戦うリリイの行き過ぎたファンである。

なにせリリイというのは十代の少女であるし、可憐な容姿でアイドル的な人気を博す少女も多い。リリイという異質な存在を社会に無理なく溶け込ませるため、敢えてそのような売り込み方をしてきた歴史もある。

考えてみるといい。世間では女子高生と呼ばれる年代の美少女たちが、学校の制服姿でスカートを翻し跳んだり撥ねたりするのだ。当然ヒュージと戦ってる最中は下着が見えるだの何だの気にしてる余裕はない。不埒な人間からしてみたらシャッターチャンスの宝庫である。

それでも写真を撮る程度で満足するなら無害と言える。撮られてしまったリリイには気の毒だが、少なくとも身体は汚されなくて済む。

彼女たちを狙う男の中にはリリイの純潔そのものが目当ての人間が存在した。彼らはリリイとヒュージの戦闘が終わるのを危険地帯ギリギリで待ち構え、決着と同時に戦場を手分けして探索する。そして人類を護るための戦いで力尽き、自力で動けるようになるか味方が回収しに来てくれるまで待っている少女を見つけると、近くの建物や物陰に連れ込んで欲望をぶつけるのである。

足腰が立たないくらい疲労困憊してるのは命を賭して市民を護ったからである。その市民から感謝されるどころか薄汚い欲望の発散対象に選ばれ、たとえ肉体は回復しても乙女の心と記憶に一生消えない傷が残る辱めを受けるリリイの胸中たるや如何許りか。

ヒュージ戦の直後に陵辱されたリリイは出撃とレイプが痛ましい記憶で直結されるため、再び戦場に出ようとすると激しいPTSDを発症して身体が凍りつき、その場で嘔吐して

倒れてしまう者もいる。

一時の肉欲を満たせば他のことはどうでもいいと考えるケダモノのような男のせいで、人類は内側からも防衛力を削られているのだ。

そんな小難しい理屈は知らんとばかりに今日も無人地帯にリリーの嬌声が響いていた。

「いやあっ！ もう許してえ！」

「ダメだ、まだ全然足りねえんだよ。もっとケツ振れ」

「もう……無理だよお……」

フロアリングの床に仰向けに寝転ぶ男がいる。彼の上で必死に腰を振っているのは神庭女子藝術高校の制服に身を包んだリリーだった。高貴な真紅の制服を脱がされ双乳が剥き出しになっている。少女はツーブロックで筋肉質な男の腰に跨がり騎乗位で腰を振らされていた。言うまでもなく彼女自身の意思ではない。精も根も尽き果てた状態で家主が鍵を掛ける間もなく逃げ出した民家に連れ込まれ、そのリビングで仲間のリリー二人とともに犯されているのだ。俺たちを満足させられたら解放してやると守られるかも分からない口約束で不確かな希望を突きつけられ縋るしかない。

「あうっ、イクッ、イツちゃう！」

ツーブロックの傍では茶髪マッシュの男が対面座位でリリーの尻を掴み下から突き上げ

ていた。何度も絶頂させられた彼女は体力を使い果たし、男に身体を預ける形でぐったりとしている。

「へばってんじゃねえよ。まだまだ終わんねーぞ」

「そ、そんなあ……あっ！」

男はぐったりしたりリイを引き剥がし床の上に寝かせると正常位に移行する。そして彼女の両足を持ち上げまんぐり返しの姿勢にすると激しくピストン運動を開始した。結合部が丸見えになり羞恥心を煽る格好にされながらも、度重なる性交によって疲弊した身体に抵抗する力は残されていない。為す術もなく膣奥を叩かれる。

「ひぎっ！ いやっ、やめてっ！」

「うるせえ黙ってろ」

雄が弱ったメスを貪り尽くす荒々しい性交の横では、一転して恋人同士のような甘いセックスが行われていた。

「あいつらはサドッ気あるからな。お前は俺に選んでもらってよかっただろ」

屈曲位で腰を動かしながら優男風のイケメンは目の前の少女に顔を近づけた。ディーブキスに持ち込むと舌を挿じ込み口内を舐め回す。舌同士を擦り合わせるだけでなく歯茎や上顎までも舐め回され、未知の感覚に混乱しながらも少女は甘い吐息を漏らす。

「んちゅ♡ んんっ♡」

蕩けきった顔で恋人のように舌を絡める少女に対し、彼は腰の動きを止めずに問いかける。

「お前さ、もしかしてファーストキス？」

こくりこくりと頷く少女を見て彼が笑う。

「そっか、じゃあ俺が全部初めてなんだな」

嬉しそうに言う。今度は少女の耳元へ囁いた。

「お前可愛いんだからリリイなんかやめて俺のセフレになれよ。危ないことなんかしないで、ちんぽで気持ちよくなってればいいじゃん」

甘い声色で囁く彼に少女は顔を赤らめる。その表情を見た彼の表情はますます笑みを深めていく。

「へえ、照れてる顔も可愛いじゃん。でもやっぱダメか。お前らにはリリイになるだけの理由があつて、それを捨てて生きるなんてできないよな。俺らみたいな人間に捕まっちゃって散々ちんぽで気持ちよくしてもらった程度じゃ捨てられないよな」

少女は自分がリリイである理由を無理やり奪ってもらいたがっている。男が強引にやめろと言ってくれたら、膣内に入ってるおちんちんの気持ちよさに負ける言い訳ができるの

に彼はそうしない。あくまでも決定権は彼女にあるという体で話す。誰に強制されたわけではなく、自分の意思で望んだことだと認めざるを得ないよう誘導する。

「……やめます……私はリリイをやめます……だから……セフレにしてください……もつと気持ちいいこと、教えて……」

見え透いた誘導尋問に抗う気力もなく少女はリリイである大義をあっさり捨ててしまう。そんなものより目の前の肉棒を味わう権利のほうを選んだのだ。

「そっかそっか、リリイやめちゃうんだ。君がリリイになった理由って年上イケメンのデカチンに負けちゃう程度の覚悟だったんだ」

自分で言わせた癖に男はわざとらしいセリフで彼女を辱める。わっと泣き出してしまった少女の膣内を射精寸前の昂ぶりで摩擦した。

「まあ仕方ないよ。リリイだってエッチなことに興味津々で性欲もある女子高生。年上の手慣れたセックスで人生観上書きされちゃうくらい普通だって」

そう言う男は今まで以上に激しいストロークを開始する。パンパンパンパンと腰を打ちつける打撃音が部屋に響く。

「はあうう！ あんん！ あっ、あっ、あああんん！」

「セフレ堕ち記念だ。いっちばん激しいイキ方させてやる」

宣言通り、男の抽送は苛烈を極めた。重ねた唇から舌を吸い出してやりディープキスも同時に行う。キスハメに熱中する少女は自分から男の背中に手を回す。

やがて、限界に達した少女が絶叫する。

「ふぐううう♡♡♡ ぐぶうううっ♡♡♡ ふびいいいい♡♡♡」

——ビクンッ、ビクビクビクッ!

全身を痙攣させ、男の背に爪を立てながら少女は絶頂を迎えた。男の唇に口を塞がれていたせいでくぐもった声を洩らしながら達してしまった。

「ふうー、出た出た」

射精するだけして満足したのか、唇を離して満足気に男は呟く。一方、解放された唇で酸素を求め喘ぎ続ける少女は未だに余韻から抜け出せないでいる。

「これからは俺が呼び出したら二十四時間いつでもセックスしに来ること。ちゃんとセフレらしい格好して来いよ」

男が言うのと恍惚とした表情で少女は頷いた。

犬塚虎吉という男

「ふー、出した、出した」

スッキリした顔でツープロックが民家から出て来る。その後ろにはマッシュと優男もいた。彼らは最終的に一人三発ずつナカ出しして全員からリリイやめてセフレになります宣言を引き出した。

「この調子でどんどん増やして行こうぜ」おまんこを掻き混ぜた指の残り香を嗅いでニンマリしながらマッシュは言った。

「やっぱヒュージ戦の後は狙い目だな。犯しごろのリリイが無防備に転がってるなんて天国じゃん。ヒュージ様々だよ」

口々に言う男たちの顔には、一様に気持ちいい汗をかいた充実感が漲っていた。彼らにとってリリイレイプは食事、睡眠、入浴と同じくらい心身を健康に保つ行為だ。戦闘エリア付近に身を隠すのは命懸けな場面もある。戦闘が終わったように見えても付近にヒュージが潜んでいる危険性だってある。それでもヒュージ戦の後なら好きだけリリイを食い散らかせるのだからリスクを負う価値はあった。

それに戦場でリリィを犯すのは最高に気持ちいいのだ。危ないドラッグをキメたような多幸福感がある。

アドレナリンどっばどっば吹き出しながら戦場を逃げ回っていると子孫を残さんとする本能が呼び覚まされるのか、ちんぽが鋼のように硬くなってくる。死に近づくことでしか得られない異様な興奮状態。そのちんぽで若い雌のまんこを犯すと生きててよかった、生きててよかった、生きて再びおまんこ食えるなんて俺は幸せだと感動が込み上げてくる。

「次は誰をヤリに行く？ 俺的にはあのグラン・エプレだっけ？ 前に雑誌で見たレギオンの丹羽灯莉とかいうガキを食いたいんだよな。知ってるか、あいつ僕っ子なうえにユニコーンを探してるんだぜ。だけどユニコーンって処女以外は近づけさせないらしいんだよ。ちんぽ挿れながら耳元で『灯莉はもう処女じゃないからユニコーンと出会えないねえ』って言ってるよ」

「相変わらず趣味悪いやつだな」ツープロックはゲハハと笑うマッシュに嫌なものを見る目を向けた。

「俺はグラン・エプレなら定盛姫歌ちゃんかな。自分のこと可愛いって分かっている女の子に耳元で可愛い、可愛いって囁きながらいっぱい気持ちよくしてあげたときの照れながら、おまんこキュンキュンさせてどこまでも登り詰めてイキ止まらなくなっちゃう感じがたま

らないんだよな」

「グラン・エプレなら宮川高嶺だろ」これだけは譲れないとツープロックが断言した。「ああいうお高くとまって男なんか寄せつけませんってツラしてる女をチン堕ちさせてこそそのレイプじゃないのかよ」

「いやいや、あえて夢見がちで子供っぽい子に男と女の現実を突きつけて心折るのがいいんだろ」マッシュも負けじと言い返す。

「そもそもが二人とも乱暴すぎ。もっと女の子は可愛がってあげないと。さっきの子だって俺の愛が通じて最後は自分から脚を絡めてきたろ」

優男の主張を「どう言い繕ったってしよせんやってることは俺たちと一緒にだろ」とツープロックは相手にしない。

彼らはリリィを専門に狙うレイプ集団だ。それぞれの方法で捕まえたリリィを墮とすことが生き甲斐。組んだほうが何かとやりやすいので手を結んでいるが、リリィを犯すという目的以外に共通点はない。

「お疲れ様です」

三人が平行線の議論を繰り返しながら通りまで歩いてくると、ガードレールに座って辺りの様子を窺っていた男が声を掛けてきた。この男の名は犬塚虎吉。最近レイプグループ

に参加したばかりの新人で雑用を押しつけられることが多い。今も三人がリリイを犯している間、誰か近づいてこないか通りを見張らされていた。

「おう犬！ お疲れさん。見張りご苦労だな」

ツーブロックが労うと他の二人も軽い感じで挨拶した。彼らの視線は自然と虎吉の股間へと向いていた。そこはズボンの上からでも分かるほど膨らんでいた。山芋でも隠してるようなシルエツトが浮かぶ。それぞれ平均以上のナニを持つ三人でも、虎吉ほどのデカチンは見たことがなかった。

三人の視線を感じた虎吉は照れ臭そうに頭を掻く。「いやあ、さっきから俺の番はまだかなと考えて勃起が止まらなくて」

「仕方ねえよ。あんな可愛い子たちのまんこ味わえると思ったら誰だってフルボッキするって」マッシュは言いながら虎吉の肩を軽く小突いた。

「そうそう、俺も我慢できなくてつい三回もヤっちゃったよ」優男が同調する。

「今回も完璧に墮として、みんな俺らのセフレにしてやったぜ」

俺らにかかればどうってことはないけどよとツーブロックが誇らしげに言った。

「すげー！ さすがっすね。三人にかかればリリイもただのおまんこホールっすか」

虎吉が大袈裟に褒め称えると悪い気分はしないのか優男の頬が緩んだ。

「当たり前だろ。リリイだって女なんだからセックスしたいに決まってるじゃん」

「そうですね。じゃあ、さっそく俺もおまんこしてきます」

三人がしてる間の見張りを務める代わりに、終わったら一対三で楽しめるのが虎吉の特権だった。と言っても警戒警報が解除されて住人が戻ってくるまであまり時間がないため、まったりじっくり味わう暇はない。たいていはおまんこの食べ比べだけして終わる。

虎吉は自分のセックスが三人から残飯処理と呼ばれていることを知っていた。彼らが散々に犯した後のおこぼれに預かるだけの自分は蔑まれていることも気づいている。それでも彼らの下に就いて雑用をこなす理由は、手分けして探したほうが弱ってるリリイを見つけやすいことと、虎吉自身の業が深い性的嗜好にあった。

三人と別れた虎吉は先ほどまで彼らがリリイを犯していた民家に入る。今度は入れ替わりで三人が通りを見張ってくれているので、スマホに連絡が来るまでの僅かな時間は楽しませてもらう。

少女たちは犯され抜いて動く気力も体力もないのだろう。白濁液を股ぐらから溢れさせリピングに倒れていた。

「よっと失礼するぜ」

パンツごとズボンを下ろして近くにいた少女の腰を引き寄せた。

「あうう……もうやめてえ……」

弱々しい抵抗を見せる少女だったが、ずっぽりと巨根を啜え込んでしまえばたちまちセックスモードに入る。

「ああん！　すごいっ！　硬くて太いのが入ってきたあ！」

虎吉が最初に挿入したのは優男と恋人プレイを楽しんでいたリリィだった。別な男とラブラブエッチしてセフレ宣言までした直後だというのに、挿れただけで少女の頭の中は虎吉のちんぼ一色に上書きされてしまう。

「あうう……すごいっ……おちんちんおつきい……ああんっ、ああんっ、奥まで……あっ、あっ、ああああんっ！」

軽くお遊び程度のピストンしてやるだけで少女は身体をビクンビクン震わせイッてしまふ。優男とのセックスで仕上がっていた身体の敏感さもあるが虎吉のちんぼは大きいだけでなく、女の膣内に存在する弱点を一度に刺激する形に恵まれた天性の女殺しだった。

「またきたあ……こんなに何度もイっちゃったら頭バカになっちゃうよお……♡」

少女はすでに自分の立場を忘れ、ただ快楽を貪るだけの動物になっていた。おまんこの奥を優男にトントンされて彼に誓ったはずの愛は粉微塵に碎け散った。

「セフレしてもらおうならこっちがいい。こっちのおちんちんでエッチしてもらいたい」

「俺のちんぼのほうが気持ちいいんだ」

「うんっ！ あんっ！ こっちのほうがいいの。こっちのおちんぼがすきな。おっきいおちんぼでえ、おまんこいっぱい突いてっ♡」

虎吉の業が深い性的嗜好——それは寝取り性癖だった。三人が犯して犯して犯し抜いてチン堕ちさせたと思つていた少女たちに、俺に抱かれればもっと凄い体験ができるよと教えてやる。そして三人から自分に乗り換えさせる。あの人たちより凄いと夢中で叫ぶリリーの姿を見るのが虎吉の生き甲斐だった。

正常位からバックに体位を変えて突くと少女は一層大きな声で喘いだ。尻肉を掴まれ後ろから犯されるときが一番感じるようだ。

「ほら、こうするともっと奥に届くだよ」

そう言つて腰を押し付けると、さらに深くペニスがめり込んでいく。

「ああっ、そこお、そこがいいの♡ お腹の奥に当たってるう」

ポルチオ性感帯を強く突かれて少女が歓喜の声を上げる。もはや彼女は痛みすら快感に変換していた。

「くっ、締まる……ッ！」

膣壁の締め付けを受けて虎吉は限界に近いことを悟った。ラストスパートをかけるべく激しくピストンを開始する。パンパンという肉を打つ音が部屋中に響く。

「ああ！ 激しすぎる♡ そんなにしたら壊れちゃう♡ んっ！ ん、あっ、ああっ、いいっ、そこっ！ 奥、いいっ！」

「これくらいじゃ壊れたりしないから安心しろ。むしろ、どんどん感じてよがってくれ。そのほうが興奮するからさ」

「は、はい、わかりました……あん、はあ、はあん、んう、いい、いい、これいい、すごくいい、もっと、もっとください」

「いいぜ、その調子だ」

突然だが虎のペニスには釣り針で言うかえしのような部分が存在する。これが雌の膣内を刺激して排卵を誘発すると言われているのだが、虎吉の肉棒も異常発達したカリが同じような役割を果たしていた。彼に犯された女は孕みたくて孕みたくて仕方なくなり種付け待ち卵子をポコッと排出してしまうのだ。

「ああ、イク、イキます、私もうイキそうです」

この少女の膣内でも孕みごろ卵が排卵された。

「いいぞ、イケよ。思いつきりイキまくれ」

宮川高嶺を拾った日

虎吉は自分の利益になるなら地面に埋まりそうなほど下手に出ることも相手をヨイシヨ、ヨイシヨと神輿に担いで煽てることも厭わない。彼自身ちんぼのデカさと性欲の強さ意外に己の長所を認めていなかったし、恐らく周りから見ても同じ評価だろうと自分に対する期待は早々に見切りをつけていた。顔がいい訳でないし頭も悪い。名前が書ければ合格すると言われた地元の高校を何とか卒業させてもらい上京して早数年。幸い体力は人並み以上にあつたためヒュージの出現で頻繁に街が荒れる時代では現場仕事に困らない。未来への展望なんてものを描かなければそれなりに日々はやり過ごしていける。

生活には困らないが感動もない毎日を過ごしていたある日、職場の先輩だったツーブロックに声をかけられた。

「一緒にリリイを犯して回らないか」

以前からリリイを専門に狙うレイプ集団がいることは知っていた。対ヒュージ戦の切り札であるリリイは防衛戦力の花形。彼女たちがいなければ人類はヒュージの脅威に飲み込まれてしまうだろう。そのためスキラー数値が高くCHARMを扱う適正に長けた少女は

手厚く保護され、人々の憧れや崇拜を受ける存在となった。そんな状況にあっても一枚岩になれないのだから、ほとほと人間は愚か。

戦場での主役を少女に奪われた男たちの中には、リリイの存在を疎ましく思う者も出てきた。彼らはリリイへの厚遇が不公平で男性差別的だと主張した。特に『日本の正しい家族の形を考える会(家族の会)』と名乗るグループは過激な主張を展開して公安にもマークされていった。

「我ら日本の正しい家族の形を考える会は、女が男を立て、家を守ることで国家が繁栄してきたことを忘れる昨今の風潮に異議を唱える。男女の違いを学び、男を敬う気持ちを育てねばならない時期にガーデンなどという閉鎖的な空間で、女子同士が乳練り合うことが健全な子女教育であろうか。断じて否！ このままでは国が滅びてしまう。我らの願いは男と女が本来の役割を取り戻すことなり」

彼らは男根による社会の矯正を訴えた。早い話がリリイをセックスで籠絡し、一端の戦士気取っていても女はちんぽに勝てないと教えねばならないと主張したのだ。ちんぽに気持ちよく、楽しく、幸せに負けて子供を産ませていただくのが女の幸せだと思ひ出させねばならない。

そこまで尖った主張に本気で同意する人間は極少数だった。しかし自分のことを強いと

思つてる女を組み敷き、穴という穴を使ってやりたいと考える潜在的な支持者は全国にくさんいた。それらは正式なメンバーとして会の名簿に記されていないため警察でも全容を把握できなかった。

だから虎吉が最初に声をかけられたとき、ツーブロックのことをヤバい思想に感化された人物と警戒したのは妥当である。だが少し話してみると彼に思想性が皆無なことはすぐに分かった。単にツーブロックは女子高生とやりたいだけだった。それがリリイという強者を穢す行為ならより強い性感が得られるだけのこと。

二人は意気投合した。虎吉にとってもツーブロックの誘いは渡りに船だった。生来の性欲を持って余し発散する場に困っていた彼にとって、十代の雌穴を使える機会は逃したくなかった。グループで協力するなら単独犯よりも失敗は少ないように思えた。向こうは向こうで虎吉の性欲の強さを把握しており誘えば断らないと確信しているようだった。

そうして虎吉はツーブロックたちのレイプ団に加入した。他の二人からも後輩扱いを受け、雑用を押しつけられたが気にならなかった。リリイはスキラー数値だけでなく顔面偏差値とおまんこも優秀らしい。処女を奪われたばかりの新鮮な雌穴に突っ込んでると些事の一切がどうでもよくなった。目の前にあるトロトロに蕩けたおまんこの気持ちよさだけが唯一のリアル。これを味わえるなら雑用くらいなんてことない。

どの娘を抱いてもリリイとのセックスは最高だった。十代の瑞々しい肌は舐めると甘い。日ごろから運動してるためおまんこの締まりは抜群。膣壁は程よくうねって挿入者を優しく包み込む。初めは嫌がり、恐怖し、男を嫌悪していた少女たちが、何度も抱かれるうち従順になっていく過程が好きだった。快楽に屈して堕ちていく様がたまらない。この手で屈服させた喜びは何物にも代え難かった。

充実したレイプライフを送っている虎吉だが彼には満たせぬ思いがあった。神庭女子藝術高校の宮川高嶺。リリイ専門誌に掲載されていた写真を見て一目惚れして以来、彼女には憧れにも近い感情を抱いている。色素の薄い髪を腰まで伸ばした涼やかな目元が印象的な美少女。ハイウエストのベルトで絞られた腰は乱暴に掴んだら折れてしまいそうな細さ。それと対照的にバストは深窓のお嬢様然とした見た目に似合わない女の性を感じさせる大きさ。

これまで出会ってきたどんな女よりも魅力的に映った。こんな綺麗な女がいるのか。しかも女としての魅力だけでなくリリイの実力もあるのだから最高だ。

美しいものを穢したくなるのは人間の性だ。虎吉は高嶺に自分の理想を重ね崇拝する一方で他の女と同じように——いや、それ以上に滅茶苦茶にして骨の髄まで男とセックスする好さを教えてやり、自分のものになりたいと考えるようになった。

さて。こんな話を長々としてきたことには当然理由がある。

今、虎吉の前に一人の少女が倒れていた。新たな獲物を物色中だった餓狼の前で気絶している不幸な少女は神庭女子藝術高校の制服に身を包み、色素の薄い髪を腰まで伸ばした、制服の上からでも分かる巨乳の持ち主。

「宮川高嶺だ」

己の興奮が信じられない虎吉は少女の名前を口に出して呼ぶ。雑誌でその姿を目にしてから抱きたくて抱きたくて仕方なかった、しかし都合よく戦場で拾える可能性は低いと半ばあきらめていた高嶺が、目の前で気を失って倒れているのだ。

これは千載一遇のチャンスというやつだ。このチャンスを逃したら二度と高嶺を犯せる日は来ないと確信した。虎吉は高嶺の脇に手を差し込み抱き起こす。

「俺みたいな男に捕まって可哀想にな」

言葉こそ同情的だが彼女を犯さない選択肢など当然ない。もし一生分の幸運と引き換えに高嶺を自分のもののできたら、あんなことやこんなことしてやりたいと考えてきたプランが十や二十では利かないくらいあるのだ。

「これからお前のまんこは俺が貰うぜ」

今まで抱いたどの女でも味わったことない最高の快感を期待して股間がいきり立つ。ズ

ボンの中で陰茎が膨らみ布地を押し上げる。窮屈な空間に押し込まれたデカチンが痛いよ、痛いよと訴えてきた。一刻も早く欲望を解放したかったが我慢。まずは彼女を凌辱するための下準備からだ。

「せっかくお姫様を捕まえたんだ。道端で雑に抱くなんてことはしないからよ」

未だ目覚めぬ少女の身体を横抱きにする。肉体労働で鍛えた腕力で高嶺をお姫様抱っこした虎吉は、まだ住民が戻って来ない街を無言でラブホ街のほうに歩いて行った。

部屋は選び放題だった。どうせ金を払うのは自分だし、そのぶん好き勝手やらせてもらうつもりだったので多少高くても長居するのに快適そうな部屋を選んだ。内装はピンク色の安っぽいものでなく、ブラウン系で統一されており落ち着いた雰囲気がある。大きなベッドが置かれた寝室の他にバスルームやトイレ、広々としたリビングスペースがあった。如何にもヤルための場所といった性欲ギリギリな感じはない。

「じつくり、たっぷり、宿泊で楽しむならこういう部屋のほうがいいよな」

キングサイズのベッドに少女を寝かせる。スカートの裾からのぞく太ももにゴクリと喉が鳴る。彼女の脚線美だけで射精できそうだと思った。

(いやいや落ち着け。お楽しみはまだ先だ)

逸る気持ちを抑えて虎吉はスマホを取り出す。カメラアプリを立ち上げて写真を撮った。

これでもう逃げられないぞ。撮られていたとも知らず眠り続ける高嶺を見て虎吉は舌なめずりをする。全身、顔のアップ、胸を揉まれている姿、スカートをめくってタイツ越しのパンツ撮影と抵抗されないのをいいことに二十枚ほど撮った。顔のアップを撮影する際は彼女の美しい頬をいやらしく舐め回したほか、軽く唇も重ねさせてもらった。段階を踏んで楽しみたいのでまだ触れるだけのキスだが、それでも唇の柔らかさや甘い匂いにくらくらしてしまう。本格的に触れ合ったら興奮しすぎて少女が壊れるまで抱き潰してしまうかもしれない。

写真を撮ってる途中でツーブロックからメッセージが届いた。彼らはターゲットにできるリイを見つけられなかったので撤収するらしい。好都合に好都合が重なる。誰かが自分が高嶺を抱かせようと舞台を整えてくれているようだと感じた。

虎吉は自分もリイを見つけられなかったと嘘をついた。そして勝手に帰るので迎えないらなと返信する。現地解散は珍しいことではない。虎吉と三人は性欲で繋がったチームメイトでこそあれ友だちではないからだ。

「念には念を入れてつけておくか」

そう言って虎吉が取り出したのは部屋の自販機で買った手錠だ。ボタンを押せば解除できるおもちゃだが後ろ手に嵌めておけば見えないうろ。万が一、目が覚めた彼女が暴れ

たり叫んだりしてもこれなら大丈夫。

「よし、じゃあ始めるとするかな」

独り言が増えるのは緊張している証拠だ。さすがの彼も夢にまで見た瞬間が訪れては平静でいられない。

仰向けでスー、スーと寝息を立てている高嶺に覆い被さっていく。彼女の首筋や胸元に顔を近づけ思いつきり深呼吸した。戦闘後の身体は仄かに汗ばみ、うなじの辺りは体臭が濃くなっていた。それがちっとも不快でない。それどころか媚薬香のように虎吉の血液を下半身に集めてしまう。そこは第二の心臓であるかのようにどっくん、どっくんと脈打つ。窮屈だと叫ぶ相棒を解放してやるため虎吉は服を全部抜いだ。

「宮川高嶺の前で脱いでる。裸になってるんだ。……へへっ、起きたら目の前に全裸の男がいて、高嶺はどんな反応してくれるかな」

普段どおり冷静に振る舞えるか、それとも少女らしく悲鳴を上げるのか、ひよっとしたら自分の身に起きてることを察して泣き出してしまいかもしれない。

「ああ、たまらん。ずっとこうしたかったんだよ」

虎吉は高嶺の耳の裏に何度もキスした。そこは特に女のフェロモンが濃く香った。匂いを嗅ぐたびに脳髓が痺れるような心地になる。頭がぼーっとする一方でちんぼのほうはギ

ンギンにいきり立っている。早くこの雌穴にぶち込んで腰を振りまくりたいと訴えてくる。逸る気持ちを抑え胸鎖乳突筋に沿って白い首筋にキスマークを残した。いくら彼女が否定しても鏡を見るたび、この身体は男に抱かれてしまったのだと思ひ出すように痕をつける。鎖骨にも吸い付き赤い花びらを残すと今度は胸に標的を移す。制服の上から豊かな膨らみを揉んだ。彼女のおっぱいは虎吉の手のサイズにピッタリだった。まるで俺に揉まれるため生まれてきたような身体じゃないかと有頂天になる。

さっさと服を脱がせてぶち込んでやれとちんぽはギンギンにおっ勃っていたが、虎吉は『神庭女子藝術高校の制服を着た宮川高嶺』を犯すことにこだわりを見せた。存在の核となるアイデンティティごと犯して彼女を完全に手に入れるつもりでいた。

高嶺に覆い被さり彼女の首筋や胸元にキスを繰り返したまま、虎吉は胸や尻を撫で回す。少女から女に脱皮する過程にある高嶺の肉体は程よく引き締まっていながら男を楽しませる弾力も兼ね備えている。明日の朝まで撫で回し続けても飽きそうになかったが無論それだけで済ませるつもりはないので虎吉はスカートの中に手を差し入れた。クロッチ部分に指の腹を押し当て揉み込んだ。円を描いて処女の硬いマン肉をほぐしていく。

「少しでも柔らかくしとかないと俺のを挿れるのはキツイぞ〜」

やがて布越しでも高嶺の股間がじっとりしてくるのが分かった。調子に乗った虎吉は自

分がつけた首筋のキスマークを舐め回しつつ、下半身ではクリトリスに爪を立ててカリカリする。いくら優秀なリリイでも女の身体である限り性感を感じる場所、行為はそこいらの女と変わらない。敏感な肉芽を引っ搔かれて高嶺の腰が僅かにベッドから浮いた。

「高嶺わかるか？ 女同士で百合百合してるリリイでもクリちゃんカリカリされたら男の手で気持ちよくなるんだぞ。いっぱい感じさせて俺のセックス忘れられなくしてやるからな」
美少女の感じてる姿に嬉しくなった虎吉は執拗なクリ責めを繰り返した。上半身では山の頂上にあるぼちちも同じように指先でカリカリする。上と下にある敏感な突起を同時に衣服の上から引っ搔かれる高嶺は、鮮烈だかもどかしくもある愛撫に魅力的な肢体をくねらせた。

「んっ、ふっ、ふう、ん、んんっ、あ、あっ、ああっ」

初めて触れられた男の手。力強くも乱暴ではなくポイントを押さえた刺激に高嶺の口からくぐもった声が漏れ始めた。股間の湿り気も強くなってくる。スカートの中は梅雨時の靴箱のように湿度が高くなっていった。顔を突っ込んで思いつき息を吸ったら昇天してしまいうくらい良い匂いがするだろう。

「いい声だ。もっと聞かせてくれ」

虎吉はショーツの中に手を突っ込んで秘所に触れた。割れ目に沿って指を上下に動かす

とクチュリと音がした。眠ってる間に弄られたため高嶺は精神的な拒否反応を示せなかったのだろう。身体への刺激に素直に反応して愛液が溢れていた。

（感じてやがる。あの宮川高嶺が俺なんかの愛撫で）

手マンで濡れる女など見飽きた虎吉であっても、対象が憧れの存在となれば新鮮な感動が得られるものだ。高嶺の愛蜜を指に取って口に含む。甘い味が口内に広がる。もっと味わいたくて何度もおまんこを指で掻き混ぜては、濡れた指を口を持って行った。まるで中毒になったように止められない。舐めても舐めても溢れてくる淫液の味に酔い痴れる。

（さて次はどうしようか）

これだけ濡れていれば挿入に支障はないだろう。虎吉の股間ではピンピンに勃起した肉棒が俺を使ってくれと自己主張している。血管が浮き出てグロテスクに赤黒く変色したそれは、腹にくっつきそうなほど反り返っている。亀頭の前からは透明なカウパー腺液が垂れていた。竿を握ると火傷しそうなくらい熱い。我慢汁のせいで掌全体がヌルヌルした。それを潤滑油代わりにして扱く。すると快感のあまり声が出そうになる。目の前に最高のおかずがあるのだから無理もない。

もしこのまま高嶺の腔内に挿れて射精したら最高に気持ちがいいだろう。だが焦る必要はない。今日はじっくり楽しむと決めたじゃないか。せっかくここまでお膳立てしたのだ、

最高の快樂を得るためにもう少し我慢しなくては。

そう決めた彼はまず高嶺の唇を舐めた。柔らかな唇は極上の果実を思わせる甘美な味だ。舌を挿し入れて中を掻き混ぜると唾液の甘さが増してより美味くなる。この感触だけでもちんぽを射精に導くには充分なエロさがある。

「まったく」と虎吉はわざとらしく溜め息をついた。「リリィに憧れられるリリィの宮川高嶺が、こんなに男を挑発するスケベボディの持ち主だなんて」

言葉とは裏腹に口調は弾んでいる。彼の視線は豊満なバストやくびれたウエスト、形の良いヒップやむっちりした太ももに向けられる。高嶺という女の身体を舐め回すように視姦しながらちんぽを扱っていく。鈴口から漏れる先走りで水音が立つほど激しく擦った。「おっと、どうせ擦るならこっちで」

虎吉は己の分身を高嶺の股間に押し当てた。彼女の脚を魅力的に彩る黒タイトの感触が心地よい。脚の付け根に押し付けたまま腰を振る。

「はあ、気持ちいい。これじゃあすぐに出そうだ」

高嶺の秘部は意外とぷっくり肉付きがよい。そこが放つ熱を感じてますます昂ぶってくる。美少女の下着にカウパー液を擦りつけながらピストンしていると、ちんぽは未だかつてないイライラ度で怒張する。

「んっ、んっ、んあ、あああっ、いやっ、やつ、あんっ、ふわっ、ううっ、あん、んっ、んっ、んんっ！ あっ、ああ……そんなんっ……くううっ！」

寝ている間も敏感な部分を擦られて高嶺は嬌声を上げた。無意識に腰を浮かせてさらなる愛撫を求める。その行動が雄を刺激するのだと眠ってる彼女には気づけない。

「意識がないのに反応してしまうって事は、つまり高嶺の中に眠る雌の本能がもっと気持ちよくしてもらいたがってるんだな」

虎吉はさらに大胆になっていく。下半身を擦り合わせたまま再び高嶺に口づけた。舌を入れて口の中を蹂躪する。菌茎をなぞり、上顎をくすぐり、舌を絡める。知らない感覚に翻弄される高嶺は、ただされるがまま受け入れるしかない。

「……んん……あ……はあ……」

ピチャピチャと濡れた舌を擦り合わせる水音の合間に高嶺の鼻にかかった息が漏れる。それがまた虎吉を興奮させた。彼女の吐息ひとつでちんぽは臨界点に近づく。

彼女は今どんな夢を見ているのだろうか？ 誰かに抱かれてる夢だとしたら相手は？

高嶺には同じگران・エプレに所属する今叶星という幼馴染みがいる。二人は公私ともに仲が良く、リリースアンの間では『お互いを想い合う関係』とだいぶボカした言い方をされてきた。ひょっとしたら幼馴染みとの百合レズを夢で見てるのかもしれない。

「現実には男にくっさいちんぽ擦りつけられて気持ちよくなってるんだけどな」

虎吉は少女たちの恋物語を否定する。そんなものはそばに男がいなくてもゆえの代替品でしかないと嘲笑した。百合？ ふざけたことを。女同士の恋愛なんて所詮はただの遊びだ。虎吉は女同士というものに幻想を抱いたりしない。そういう甘ったるい関係を目の当たりにするとむしろ苛立ってしまう。おまんこや子宮がなんのためにあるか現実を直視しろ。分らないなら俺が理解らせてやる。

虎吉は高嶺のベルトを外し、制服の上をまくり上げた。

「女子高生の癖に黒下着か。色気づきやがってと言いたいところだが、まあ確かに高嶺には黒が似合うな」

実年齢より大人びて見える彼女に背伸びしたセクシーな下着は合っていた。黒いブラに包まれている双丘は濃密な花の香りにも似た匂いで男を誘っている。ブラも上にズラして生乳を露出させると上品で小ぶりの乳首がツンと尖っていた。

「これが宮川高嶺の生乳。ここを拝んだ男は俺以外にいるのかよ」

「んっ、ん、んあっ、ああっ」

胸を揉まれた高嶺の口から甘い声が漏れた。彼女が目を覚ました気配はない。マッシュマロのように柔らかい乳房は簡単に形を変えた。下から持ち上げて離すと反動でぶるんと揺

れる。乳首を摘んで捻ると喘ぎ声が大きくなった。

「ふあ、あはあ、やつ、あつ、あひつ、ひつ、ああんっ」

痛みとも快樂とも取れる声に嗜虐心が煽られた。

「可愛い声だな。乳首を磨りつぶされて感じてるのか？」

インタビューでの高嶺は常に落ち着いた雰囲気で優雅な佇まいを見せていた。それに比べると快感に上ずる声は幼い印象を受ける。彼女が年相応の少女であることが垣間見えた。「おっぱいを使わない手はないよな」

そう言うと虎吉は高嶺の胴体を跨いで彼女の胸にちんぽを押し当てた。乳房を両手で掴んで寄せると谷間ができる。深い谷底からは濃厚な雌の匂いが漂ってきた。

「宮川高嶺のパイズリだ。リリオオタクどもが聞いたら泣いて悔しがるだろうな」

虎吉は己の極太ペニスを高嶺の胸でサンドイッチした。仕上がりはサンドイッチというよりも大食いチャレンジメニューのホットドッグのようであったが。

胸の膨らみの間に挟み込んだ太茎を前後に動かす。カウパーだらけの薄汚いちんぽが美少女の胸の谷間でにちゃにちゃ粘っこい音を立てた。腰を大きくグラインドさせると時たま亀頭が高嶺の唇に触れた。美少女の亀頭キスはそれだけで腰がビリビリ痺れるほど気持ちいい。

弾力のある柔らかさに挟まれるのは格別だった。精液が込み上げてきて尿道口がパクパク開くのが分かる。もう限界が近い。かつてないほど興奮している精神の作用だろうか。いつもより早漏気味だった。

「まあ、いいや。ここいらで一発射精しておくか」

虎吉は高嶺の胸をちんぽに強く押しつける。おっぱいが押し潰されて形を変えるくらい肉棒と密着させる。そして眠っている少女のことなど考えず好き勝手に腰を振りたくった。射精に向けてラストスパートをかける。

「おらっ！ 射精すぞ！ 受け取れっ！」

勢いよく発射された白濁液は高嶺の顔面に降り注いだ。量が多く勢いもあるため鼻先から唇にまでかかってしまう。美少女の整った顔に精液パックを施してもまだ射精し足りない。残り汁が制服を汚し髪にもべったり付着した。シャンプーしてもなかなか落ちそうにない。しばらくは髪からレイプ犯のくっさい精液臭がしそうだ。

「ふうー射精したなあ」

長い射精を終えて虎吉は一息ついた。だがまだまだ萎えない巨根は天高く屹立している。この程度で満たされるほど彼の性欲は薄くない。むしろ一度出したことでさらに昂ぶっている。今度は何をしようかと考えるだけで涎が出てきた。

卑劣な男に墮ちる宮川高嶺

まず最初に高嶺が感じた異変は息苦しさと生臭さだった。まるで夏場に魚屋の前を通りがかつたような臭い。生物の臓腑が腐り掛かっているような悪臭が鼻のすぐそばから漂ってくる。何かが顔に掛かっていた。液体と呼ぶには強い粘性を帯びている。少し水の量を多くしすぎた水溶性片栗粉のような粘液。それが自分の鼻と口を塞いでいる。

「——ぶはッ！」

息苦しさに耐えかねて高嶺が口を開けた。悪臭が鼻から入ってこないよう口で呼吸すると、粘液が唇の内側まで侵入してきた。味わったことのない苦味があった。臭いも味も触感も酷く、腐った卵でも口にした気分だ。

「お目覚めかい」

聞き覚えのない男の声だった。恐る恐る目を開けると、やはり見慣れない顔がこちらを見下ろしている。高嶺はポケットのハンカチで顔を拭おうとした。だが両手は背後で手錠を嵌められているらしい。腰のあたりで動かしてみるのがガチャガチャと金属にしては軽い音がするだけで自由にならない。

「あなた……こんなこととして……私をどうするつもりかしら……」

声の震えを抑えるので精一杯だった。身体の自由を奪われて見知らぬ男と二人っきり、どこかの部屋にいるのだ。監禁。という言葉が頭をよぎる。怖くないはずがない。それでも自分を奮い立たせて虚勢を張った。

「どうもこうも俺の女にしてやるんだよ」

男が好色そうな顔に笑みを浮かべて言った。自分の言葉が愉快でたまらないといった風だ。

高嶺は幼少期から幼馴染の今叶星に特別な感情を抱いてきた。同性の親友に抱く一般的な友情とは別種の感情だ。高嶺の人生には常に叶星の存在があった。叶星のほうも高嶺には特別な感情を抱いている。その仲の良さは他のリリイにも広く認知されており公式カッブルと言えた。

それゆえに幼いころから高嶺は男子と関わる機会が少なかった。人生の大半を叶星に捧げてきたのだから当然である。リリイとして活動していく過程で自分にも男性のファンがついているらしいことは何となく知っていたが、こうやって個人的に至近距離で欲望をぶつけられた経験はない。初めての事態に少なからず困惑し、対処を迷った。

「……冗談でしょう？」

「本気だよ」

そう答えた男が腰を突き出してくる。

「——っ！」

高嶺の顔が恐怖に引き攣った。喉奥が貼り付き悲鳴も出てこない。男の腰でグロテスクな肉の塊が揺れていた。女子高育ちの高嶺でもそれが男性器であるくらい分かる。

勃起したペニスが天井に向かってそびえ立っている。女に本能的な恐怖を抱かせる見た目と雄特有のむせ返るような臭いに吐き気がした。

「そんなもの……近づけないで……何をするつもりなの……？」

「ちんぽ使って男と女がすることつたらひとつしかねえだろ」

男の手が肩を掴んだ。仰向けに横たわった高嶺の上に虎吉が覆い被さる。裸になった筋肉質の男が覆いかぶさって来る光景は肉食獣に襲われているようだった。これから自分が捕食されると分かっているにもかかわらず、マジが枯渇したうえに両手を拘束されている高嶺には抵抗しようがない。

近づいてくる凶器から逃れようと身をよじるが無駄。がっしりと身体を押さえつけられて身動きが取れない。

「大人しくすれば最後は好くなってくるから我慢しろ」

「やめ……やめて……」

「暴れるなって」

男の手が高嶺の身体を引っ繰り返す。背後から長い髪を掴まれ、乱暴な手つきでベッドに抑え付けられた。それでいて尻は高く引っ張り上げられる。まるで自分から男を誘惑するような姿勢を取らされた。

「いやよっ、そんなもの絶対に嫌。あなたなんか……」

「暴れんかって言ってるんだろ！」

ズバーッと男の平手打ちが高嶺のヒップに炸裂した。プレイの一環で行う女の身体を気づかしたスパンキングではない。聞き分けのない駄々っ子を一発で黙らせるための暴力だ。男の尻叩きは一発で終わらず二発、三発と続いた。

「ひゃうっ！——んっ、あふっ！」

「驚いてはいるけど満更でもなさそうな声じゃないか。こうされるのが好きな女なのか」

「ち、違うわ！ そんな声出してないわ！」

「嘘つけよ。ケツ叩かれたら普通痛そうに呻くだろ」

「驚いて変な声が出ただけよ」

「じゃあもう一回叩いてやるよ」

再び振り下ろされた手がバシーンッと大きな音を鳴らす

「きゃうんっ?」

不意打ちで受けた痛みに思わず甲高い声を上げてしまう高嶺。反射的に腰をくねらせた奥で膣内がギュッと締まった。

「おいおい、可愛い声で啼くじゃねえか」

「こんなの……違う……」

高嶺は自分を見下ろす男に非難の目を浴びせる。しかし男は悪びれもせずニヤニヤと笑うばかりだ。

「痛いのが好きなら最初から楽しめるかもな」

「……やだ、本当に……やめて……」

「そういう顔もそそのな。美人はなにしても元がいいから得だぜ」

男が高嶺のショーツをタイトごと膝まで引きずり下ろした。そして背後から腰を密着させてくる。今まで感じたこともない熱く、硬く、太い塊が己の膣口に押し当てられていることを感じる。

男の挿入はゆっくりだった。亀頭の先っぽだけを入り口に押し当てた状態で静止する。そしてそのままぐりりと回転を加えながら少しずつ奥へと進んで行くのだ。

(入ってくる……あんなものが私の中に……)

亀頭の先端部が隘路を押し広げて侵入してくる感覚がある。それは想像していたよりも痛みが少なく、むしろ心地良い刺激だった。ヒュージとの戦いで一般の女子高生よりは痛みに慣れていて。そんなリリイの特性が今は男に都合よく作用したのかもしれない。

処女膜を傷つけないよう慎重に亀頭が進んでいくのが分かる。やがて亀頭全体がすっぱりと収まったところで一旦動きが止まった。そして今度はゆっくりと後退を始める。カリ首が引っ掛かるところまで来てからまた前進し、徐々に深度を増していく。

一突きごとに着実に奥へ進んでいるのが分かった。最奥部にある行き止まりにまで到達すればそこでピストン運動が始まるのだろう。そこまで行ってしまえばもう取り返しがつかないことになるかもしれない。初めてなのにいきなり中出しされて妊娠してしまうかも。最悪のケースを想像してしまうほどに相手の肉棒は大きく、遅しかった。男を知らない小娘でも女の本能が囁いてくる。この男性器で種付けされたら逃げられないと。

ずぶずぶと肉棒が沈み込んでいくたびに下腹部が圧迫され息苦しくなる。同時にぞわつとする快感があった。異物感はあるが嫌悪感はない。それどころかもっと奥まで入ってきて欲しいとさえ思う。

(嘘よ……こんなもの……)

自分の心の変化に戸惑いつつも身体は正直だった。無意識のうちに腰が動いてしまう。早く一番深いところにまで来てほしいと言わんばかりに迎え腰を打っていた。

「んあっ♡ あっ、あんっ、あっ、んん♡ ふう、ん♡」

「ずいぶん好い声が出てきたな。まだ入り口を挨拶程度に擦ってるだけだぞ」

「あひっ、ひあ、ああ♡ んっ、ひううっ♡ くひっ、あ、あ、そこっ、そこお、そこ弱い、からあ♡」

「ああ。ここが高嶺のGスポットか。教えてくれてあんがとさん」

膣内の浅い場所。お腹側の入り口に他よりも快感が強い場所に男は先端をピンポイントで当ててくる。精密射撃のような腰使いで浅瀬を弄られていると膣奥が自分たちもして欲しいとうねった。

その願いはすぐに叶えられることになった。

「もう浅いところは俺の形に慣れたようだし……いよいよ宮川高嶺の貫通式といくか……分かるだろ？ 俺の先っちょが高嶺の処女膜つんつんしてるの」

「あんっ♡ そんな♡ やっ♡ あっ♡」

男が一度ペニスを抜いたかと思うと、すぐさま勢いをつけて突っ込んできた。一気に根本近くまで押し込まれる衝撃に視界が明滅する。その過程で膣内に張っていた肉の膜が千

切り取られた。ムードもへったくれもない力任せで乱暴な処女喪失。自分の意思とは関係なく暴力で純潔を奪われた。

それなのに結合部からブシュッと愛液が飛び散りシートを濡らした。

「んあああああああ~~~~~」

獣のような咆哮を上げ絶頂に達する高嶺。背中を大きく反らしビクビクと痙攣している。「分かるか高嶺。お前を女にしてやったぞ。誰も触ったことがない宮川高嶺の核心に触れた初めての人間は俺だ！」

感じ入ったような声を出して男は腰を高嶺のヒップに擦りつけてくる。根本まで埋め込まれた巨根は処女の狭い腔洞を蟻が這い出る隙間もないくらいピッタリと塞ぐ。先端は高嶺の行き止まりに押し当てられ腔壁越しに内臓を圧迫した。

「はひいつ、ふっ、くうううっ♡　そ、そんなに、ふかいとこまでえ……っ♡」

「ここまで何かを挿れたことはないだろう。たっぷり味わってくれ」

男が最奥部に押しつけたまま腰を回す。女の肉体の最もデリケートな部分——子宮口やポルチオを石のように硬い亀頭がグリグリした。強烈な圧迫感と共に耐え難い性感が襲いかかり、高嶺は身悶える。

男の腰振りは激しいものではなかった。自分が一方的に性感を得て射精するための動きで

はない。じっくりと時間をかけてねちっこく、執拗に、確実に高嶺の肉体に男とするセックスの好きを教え込むための腰使いだった。大人びて見えても男と女のなんたるかが分かってない初心な百合少女に、男の味を刻み込もうとしているのだ。女同士で乳繰り合うより、女の身体は自分のようなデカチン様に使ってもらうほうが何百倍も気持ちよいのだと教えて墮とそうとしている。

「ひっ！ やっ、だめっ、グリグリされると、はっ、はっ、はっ、はっ、ああ、ああっ！ こ、これ以上されると、おかしく、なっちゃい、そうっ！」

そんな男の企みに高嶺も気づいている。彼の目的が最初に言ったように高嶺を自分の女にすること、その手段としてセックスで言いなりにしようとしているのだ。だが気づいたからと言ってどうもできない。後背位で男の規格外な巨根に刺し貫かれ未知の快感に震えが止まらない無力な少女にできることなどなかった。

「そろそろ動くか」

男の腰の動きに合わせてベッドのスプリングが鳴る。ギシギシッ、キシキシッという音が耳につくたび、自分が犯されているのだと自覚させられる。パンパンと肉と肉を打ち付ける生々しい音が続いた。この行為の主導権は完全に握られてしまっている。バックで犯されているため男の顔は見えないがきつとニヤニヤ笑っていることだろう。

なってしまうわ……)

「誰が聞いたってちんぽに負けた雑魚メスの声だぞ。ほら、もっと突いてやるから素直になれ」

「は、はあ……はあ……ち、ちがう……私は……私は……いやっ、はひっ……」

高嶺自身が溢れさせる大量の淫蜜が潤滑剤となり、キングサイズの勃起が膣壁をずぬり、ずぬりと摩擦する。熱く、太く、硬いイチモツ完全に高嶺の体内を征圧し、我が物顔で往き来した。

(私の意志に反して腰が動いてしまう……こんな人に屈服したくないのに……)

やめなさい、はしたない、この恥知らずと高嶺は心の中で己を罵倒した。男の律動に合わせ彼女のほうからも尻を上下に振り、最深部まで易々と入って来られるよう手招きしてしまっているのだ。それはより強いエクスタシーを感じたい雌の本能に由来した動きであるため、頭で命令しても身体は止まってくれない。

高嶺は自分の肉体という己の最も身近な存在が自分の思うとおりにならない裏切りに歯噛みする。

「おいおい、そんなにヘコヘコ尻を振っておねだりしなくてもちゃんと膣内射精してやるよ」

「あつ、んんっ♡ あ……あなたのような男に媚びたりしないわ……あっ♡ あっ♡ あっ♡
勘違い……んんっ♡ しないで……いやっ♡ いやあんっ♡」

「だったらなんで自分から進んでケツ振ってるんだ？ 本当は孕ませて欲しいんだろ？」

「そんなこと……あるわけ……ないでしょうっ……んあっ♡ あっ♡ あなたが乱暴にするから、痛くないところを探してるのよ……」

「そうかい。それじゃあ俺も痛くないところとやらを探す手伝いしてやるよ」

言うなり男は膣壁のいろんな箇所を亀頭で押し、カリ首で引っ掻き始めた。広範囲を探索して高嶺の反応を楽しむ動き。医者が触診するような身体の使い方で高嶺の身体が反応してしまふポイントを探す。

ペニスの根本から先端まで使ったロングストロークは、長大な肉槍の特性を活かして膣内に余すところなく触れていった。それは男の肉棒で感じたたくない高嶺にとっては最悪の使われ方だった。

「ひぐっ♡ そっ、そこはっ♡ いやよっ♡ そんなとこばかり擦らないでえっ♡♡」

「ここが弱いのか……なら念入りに責めてやる」

「違っ、やめてっ、お願いだからもうそこばかり責めないでええ♡♡ 違うって言うのでしょっ！ やめてよ……いやっ、そんな擦られたら感じすぎちゃうっ♡♡」

「嘘をつくなよ、ここはもうぐしょ濡れじゃないか。それに高嶺のまんこから締めつけてきて俺のちんぽを離さないぞ。正直に言ってみろ、俺のデカチンが気に入ったんだろう」

「そ、そんなことないわっ、いい加減なことを言わないで頂戴っ」

「強情な奴だ……それならこれはどうだ」

屈強な肉体から休みなく繰り出される容赦のないピストンに、気高き美少女の尻が勝手に浮き上がる。天井に向かって反り返った勃起が、まるでフックのように墜壁を引っ掛けてくる。高嶺は自分が解体されて食肉倉庫の天井からぶら下げられた肉のように感じた。

(あひっ♡ んひっ♡ んひっ♡ はひっ♡ いやっ♡ これだめえっ♡ これっ♡
気持ちよすぎておかしくなるっ♡)

「自分から尻を振る高嶺、色っばいぞ。とても女子高生ガキの出せる色気じゃねえ。だけど尻を振るのは俺の前だけにしとけよ。他の人間の前で振ったら許さないからな」

彼氏か旦那気取りで男が命令してくる。なぜ私があなたの言うことに従う必要があるのかしらと普段の高嶺なら突っぱねていただろう。だが今の彼女にはその程度の余裕すらない。

男の激ピスで絶頂への階段を登らされながら高嶺が考えていたのは叶星のことだった。
(ごめんなさい、かなほ……私……もうイッてしまうわ……男の人にされて……身体は汚されても、あなたへの想いだけは……)

肉体は征圧されても精神的な勝利は譲らない。絶対に屈服したりしない。幼馴染みの顔を思い浮かべ決意する高嶺だったが、彼女の僅かな反抗も許さない男はトドメの一撃を放った。

「んっ♡ んっ♡ ふいっ♡ あひっ♡ んっ♡ んっ♡ はげし……んっ♡ あっ♡
あッ♡ あッ♡ だめっ♡ らめえっ♡ イク♡ イッちゃう♡ あはっ♡ すごい、
すごいのお♡♡」

ついに絶頂を迎えてしまった。頭の中が真っ白になり全身が痙攣を繰り返す。男根を締めつける力が強くなる。男が腰の動きを止めてもなお高嶺の身体はビクビクと震えていた。結合部からは愛液が溢れ出しシーツを濡らしている。

やがて身体を襲う快感が治まってくるにつれて、高嶺は自分が達してしまったことを実感させられた。敗北感に打ちひしがれる彼女を見下ろし、男は満足げに笑っていた。

ない屹立に舌を這わせる。

「ん、あむっ♡ あむあむあむむ♡ ちゆるるっ♡ んちゅううっ♡ ちゅっむ、ぢゆる、ちゅぽ、ちゅっぽ、ちゅっぽ、ちゅぽ♡♡♡」

後ろ手に手錠を嵌められたままの高嶺はベッドで膝立ちになり、ベッドサイドに仁王立ちした虎吉の腰に顔を突っ込んでいる。初めてのフェラチオ、それも揺れるベッドの上でのノーハンドフェラだというのに彼女の動きは安定していた。これもリリイとして鍛えた体幹やバランス感覚あったればこそだろう。

口に咥えたまま、ちろちろと小刻みに動く舌が裏筋を丹念に舐め上げ、カリのくびれたところを丁寧になぞる。唇を窄めながら頭を引くと、押し出された歯磨き粉のように尿道から精液が漏れてくる。じゆるじゆると卑猥な音を立てながら高嶺は残り汁を啜った。

これらの口奉仕を虎吉は、憧れの美少女に上目遣いで見つめられながらされている。俺のちんぽと宮川高嶺の顔が繋がっている。それだけで異常興奮して心拍数が二百まで上がった。興奮のあまり睾丸の中で作りたて新鮮な白濁液が補充されていくのが分かる。まだまだ高嶺を犯せ。この雌を完全に自分のものにしろと内なる声が語りかけてくる。

「また尻をこっちに向ける」

高嶺は一瞬だけ悔しそうな顔を見せたが言われるまま、こちらに背を向け四つん這いに

なる。スカートを持ち上げるとまだ初々しい割れ目からヨーグルトのような白濁液が溢れていた。

軽く舐めた指で割れ目をなぞる。大陰唇に触れ、小陰唇に指を押し当て左右に開くと、隠れていたクリトリスが顔を出した。そこを指の腹で軽く押しながら擦ってやる、たちまち愛液が溢れ出してくる。

「あっ、やっ、んんっ、そこ、はっ、あんっ」

「ほらもっと腰を振ってみせろよ」

「いやっ、恥ずかしいわっ」

「またちゃんぽ欲しくないのか」

「……卑怯よ……っ……こんな格好させて……」

「卑怯な男じゃなかったらレイプなんかしなかったろ」

それ以上の言い合いはせず、高嶺はクリトリスを撫でる指に合わせて尻を左右に振った。虎吉の言い分に納得したというより、これ以上は無駄だと諦めた様子だ。そんな彼女を嘲笑いながら指を離し、代わりにぬらぬらと濡れた亀頭を宛てがう。

「んっ……んん……ああっ……はあ……くっ……はあっ……」

ずぶずぶと音を立てゆっくりと肉棒を飲み込んでいく秘裂。その接合部を眺めながら虎

吉は征服感に浸っていた。あの宮川高嶺が男にケツを振り挿入してとねだっている。その相手は他でもない俺なのだ。

「奥まで入ったぞ」

亀頭の先端が柔らかいものにぶつかったところで動きを止めた。膣穴の奥深くで亀頭全体を包み込むように締め付けてくる感触だけで腰が砕けそうだ。これが処女を失ったばかりの女なのか。初々しい硬さを残しつつ、肉壁のスケベなうねらせ方などは使い込まれた十年ものまんこの貫禄がある。男を悦ばせるためだけにあるような肉穴に感動すら覚えた。

「動いてもいいよな？」

ダメと言われても動くつもりだった。むしろ抵抗してくれ、俺に屈服するなという想いを込めて問いかける。そしてたかもっと辱めてやる口実ができる。好きな子に意地悪したい小学生の気持ちだ。

「……好きにすればいいわ」

返ってきた言葉はそれだけだった。

「分かった。それじゃあ遠慮なく」

両手で腰を固定しピストンを始める。引き抜くときは絡みついてくる肉壁の感触を楽しみながら、突き入れる時は先端から根元まで満遍なく抜き上げるように。その抽送を一定

のリズムで繰り返す。ストロークの長いピストンで膣内を掻き回すたびに、ぐちよぐちよと淫らな水音が鳴り響き互いの性感が高まっていくのが分かった。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ い、いいっ、あっ♡ あっ、あああっ♡」

素っ気ない返事をしながらも高嶺まんこは虎吉のちんぽを待っていた。その証拠に動き始めるとすぐ彼女は官能に浸り始めた。喘ぎ声もどんどん甘くなっていく。

「もう感じてきたか？ もう降参か？」

「そっ……そんなわけではないでしょう……私が……んあっ♡ ああッ♡ あなたのほうが……んッ♡ すぐに……ふああッ♡ 出してしまいたいそうなのは……んッ♡ んッ♡ あッ♡ あッ♡ あッ♡」

（自分が散々っぱらイク間にやっとなをイカせた雑魚まんこの分際で強がるね）

虎吉は高嶺の尻を鷲づかみにして腰を引いた。短距離走者がスタートブロックでセットするように、子宮まで一直線で貫けるポジションを取って止まる。

「なら耐えられるんだな。よし、じゃあ全力で行くぞ」

「え、ちよっ、待って、んッ♡ んッ♡ んッ♡」

慌てて制止しようとする高嶺だったが、それより先に虎吉は激しいピストンを始めた。今まで手加減されていたのだと分かる本気セックスだ。一回突かれるごとに意識が飛びそう

になるほどの快感に襲われ高嶺は仰け反る。しかもバックからのピストンは男に主導権がある。虎吉が満足するまで、ずっと続くのだ。

「んぶっ♡ ふぐっ♡ うぐ♡ うお♡ おお♡ おっ♡ おおっ♡ いぐっ♡ んおっ♡ おっ♡ おほっ♡ おお♡」

いくら強がって最低限の体裁を取り繕うとしても、虎吉の極太ペニスが膣内を往復すると高嶺の仮面はいとも容易く砕けてしまう。下品なアへ声を我慢しようとしても口から溢れ出してくる。そして絶頂。全身が痙攣し視界が白くなる。それでも止まらないピストン。無様にイキ狂う様を見られている羞恥心すら快感に変換されてしまう。

そうやって虎吉はこれまでもリリイを快樂地獄に墮としてきたのだ。肌を合わせてしまえば無力な少女でしかない高嶺を操るなど造作もない。

「づっ♡ カッ♡ ふっ♡ ひいんっ♡ きもっ♡ 気もちいっ♡ キモチっ♡ キモチよくっ♡ ふっ♡ ふぐっ♡ くっ♡ んっ♡ いくっ♡ だめだめっ♡ ん♡」

気持ちいいけど認めたくない、堕ちてるけど墮ちたくない。高嶺の頭の中はしっちゃかめっちゃかで本人も何を考えているか分かってないのだろう。矛盾する言葉を並べる。

「いいんだぞ高嶺、無理しなくて。女子高生が本気の大人ちゃんぽに負けるのは当然なんだ。恥じゃない。認めたらもっと気持ちよくなれるぞ。変な意地なんか捨てておまんこにだけ

「ふうっ、うっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……ううっ！」

「ほらほらどうした？ 言うんだ」

「あっ、あっ、やっ、やめないで、ください……」

「グラン・エプレのリリイ、宮川高嶺は俺のちんぽで子宮の奥コツコツされてイキそうなんだろ。イカせて欲しかったら認めるよ」

「あ、はい♡ 認めます♡ 認めます♡ いっ♡♡♡ イクッ♡♡♡ イクッ♡♡♡ ああ♡♡♡ それすき♡♡」

逆らっても無駄と観念したのか、それとも快楽に負けてしまったのか。高嶺はあっさりと敗北を認めた。

「そうか、俺の勝ちだな」

勝利宣言と同時に腰を突き上げる。亀頭と膣壁が激しく擦れ合う。

「ひぎいっ！ あっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ ああ♡♡」

不意打ち気味の一撃に高嶺は大きく仰け反った。全身から力が抜け自由にならない身体をガクブルと震わせる。イキっぱなしで降りてこない高嶺に何度も激しく腰を打ち付ける。肉と肉とぶつかり合う音が部屋中に響き渡る。その度にベッドが軋み悲鳴を上げる。

「うぐうッ♡ ううッ♡ んぐッ♡ ぐううッ♡ うぐッ♡ ぐうううううッ♡♡」

絶叫と共に潮を吹き出す高嶺。その身体は陸揚げされた魚のように跳ねている。そんな状態なのにまだ意識を保っているのはさすがとしか言いようがない。ひよっとしたら気絶してしまえたほうが楽だったかもしれないが。

「まだだぞ高嶺。今日はお前の身体の隅々まで俺の臭いを擦り付けてやる」

痙攣する脛から射精寸前のちんぽを引き抜くと、愛蜜にコーティングされた肉刀は照明を受け怪しく光った。

虎吉は前の穴から抜いた相棒を後ろの穴に持って行く。

「待って！ 何をするつもりなの？」

異変に気づいた高嶺は不安そうな顔で振り向く。首から上しか動かせない不自由な格好で精いっぱい後ろを振り返ろうとしていた。

「お前はもう負けたんだから大人しく犯される」

「いやっ……待って……本当にこれ以上されたら……私……ダメになっちゃう……だから……お願い……やめて……しかも、そっちは違うじゃない……？」

怯える高嶺の顔はとても可愛らしかった。その表情を見ていると嗜虐心がそえられる。思わず舌なめずりしてしまうほどに。

「安心しろよ。ケツアクメ覚えた変態の負け犬になっても俺が飼ってやるからさ」

んがっ！ うぎ♡♡ いぐっ♡ いぎばぐなびッ！」

ヴァギナを使った通常のセックスでもイク姿を見られるのは恥ずかしいのに、ましてアナルセックスで掘られてイクなんて死にたくなるほどの恥辱に襲われているだろう。だがそれでいい。

高嶺のような一見すると気高く強い心を持った人間ほど、プライドを完膚無きまでに叩きのめしてやると一転して脆さを見せる。それが男の支配欲を満たしてくれる。虎吉は女の壊し方を知っていた。

手が届かない高嶺の花なら、自分と同レベルまで墮としてしまえばいい。

(それにしても、まんこだけじゃなくケツ穴まで絶品だな)

やはり高嶺の身体は名器だ。最初に犯したときから思っていたが、この穴は他の女と比べて別格である。数多くの女を味わってきたが、これほどの名器の持ち主には会ったことがない。まさに神が作った芸術品といえる肉体美。高嶺相手なら一晩で何発射精せるだろう。挑戦してみようか。

パンツパンツと小気味よい打擲音がラブホテルの一室に響き渡る。虎吉が突くたびに、高嶺の口から苦しそうな声が漏れる。しかし、それは痛みだけが原因ではないようだ。その証拠に彼女は自ら尻を突き出している。本人は気づいているだろうか。自分がどれほど浅

ましい雌豚に成り下がっているか。

「ほらどうした？ もうへばったのか？ まだこれからだろ」

「むううう♡ うふうううん♡ お、おひりっ……おひりもっ……あうう♡ ひううんっ、
ああ♡ ひiiiiiiii♡ おひりいやあ♡ こちゅこちゅしないでえええ♡」

バックで突かれて喘ぐ高嶺の尻を叩く。面白いくらいナカがギュウウツと締まった。

「お前、尻叩かれるの好きだろ」

さっきもパンキングで悦んでいたことを思いだし、連続で左右の尻たぶを叩く。

「そ、そんなこと……ない……あん♡ あああ♡」

「嘘つけ、さっきより締まりが良くなってるぞ」

「……い、いやっ……ち、ちがあ……！ ああんっ♡ だ、だめっ、叩かないでえっ♡」

今まで宮川高嶺にこんな扱いをする人間いなかったのだろう。さぞや大事にされ育ってきたに違いない。初めて受ける人間の——男の生々しい暴力にヒュージとの戦闘で傷つくととは別種の恐怖を感じ、恐れおののきながら一方では虐げられることの喜びも知ってしまった。

「お前は俺好みの変態女だよ高嶺。一生このちんぽで可愛がってやるからな。お前がいれば他のリリィなんていららないんだ。無駄玉撃つくらいなら全部お前のナカに射精してやる」

「そんなこと——ッ」

高嶺は弱々しく呟くだけで否定しなかった。それどころか期待するように甘い吐息を漏らしていた。彼女が今何を思っているのか手に取るようにわかる。きっと自分の人生は終わったと思ったことだろう。もうグラン・エブレにも戻れないと絶望してしまっているかもしれない。

……それが嫌だと感じないことに一番驚いてるのだろう。

「大丈夫だからな。何も心配はいらないんだ。俺がずっとそばにいてやる。お前は俺の女だ。誰にも渡さない。俺のちんぽで毎日気持ちよくなったら幸せなんだからな」

安心させるように言うが高嶺は目に涙を浮かべながら小さく頷いた。その涙の意味は何なのだろう。喜びか哀しみか。いずれにせよもう逃すつもりはない。彼女が何も余計なことを考えられなくなるまで徹底的に快樂漬けにしてやる。

「ひっ、あ、うあっ、あ、あ、あああああっ！ やっ、イクうううう！ おひりの穴でイッくうううう！」

四つん這いになった高嶺の腰をがっしり掴み、後ろから激しくピストンする。肉槍を根元まで突き入れてやると、肛門括約筋の締め付けが一層強くなった。どうやらまた達してしまっただらう。このまま休ませず続けてもいいのだが、それではさすがに限界だと思

腰の動きを止めた。

「ケツ穴でイケたご褒美だ少し休め。一息ついたら風呂に入って少し眠るか。動きっぱなしで疲れたろ。起きたら今日は泊まりがけで一晩中やり続けるぞ」

今後の予定を発表すると高嶺はぶるりと震えた。怯えているのかと思いきやそうではなかった。むしろどこか嬉しそうに見えた。どうしてなのか訊ねると恥ずかしそうに俯き小声で答えた。

「だってあなたの精液たくさん注がれるもの……妊娠してしまうわ……私……ちゃんと責任取ってくれるのよね？」

そう言って微笑む高嶺の顔はひどく美しかった。まるで天使のようで思わず見惚れてしまったほどだ。

普段は凜とした表情を見せることが多いだけに、たまに見せる笑顔の威力は凄まじいものがある。虎吉は改めて彼女の虜になった。

もちろんだと返事をする、高嶺は花が咲いたような笑顔を見せてくれた。

それから虎吉と高嶺は休憩を挟みつつ何度も愛し合った。体力の限り行為は続いた。

虎吉が満足した頃には二人とも汗と愛液、それに精液で全身がドロドロだった。ベッドは激しい情事の跡を示すかのように染みだらけになっていた。

汚れた身体と汚れたベッド。衛生的とは言えない環境でも高嶺と抱き合って眠ると幸せな気分浸れた。

この少女が今後ずっと俺のそばにいるなんて夢のようだ、目が覚めたら全て消えているなんてことないように虎吉は高嶺をしっかりと抱きしめて眠った。